

2022年7月20日(水) 第614回経済学会例会

ウクライナの西方政策—モルドヴァとの比較—

経済学研究科 吉井 昌彦

2022年2月24日、ロシアのウクライナ侵攻は冷戦後の欧州地政学状況を一変させた。ロシアは、ウクライナへ侵攻した理由がウクライナのNATO加盟を阻止することにより、ウクライナ東部に住むロシア系住民を保護するためであるとしている。

報告者はウクライナ経済を専門とする者ではないが、旧ソ連諸国・東欧経済を研究する者として、ウクライナの対西方政策、とりわけEUへの接近政策には注意を払ってきた。ウクライナと同様に、西側に接近しようとしてきた国として隣国モルドヴァがある。両国は、1991年の独立以降、「東」を向くのか「西」を向くのが最大の争点であり、ウクライナでは2014年にペトロ・ポロシェンコが（そして2019年にウォロディミル・ゼレンスキーが）、モルドヴァでは2020年にマイア・サンドゥがそれぞれ大統領に就任し、西方政策へ舵を切ることとなった。そして、ロシアのウクライナ侵攻を契機として、2月28日にウクライナが、3月3日にモルドヴァがEU加盟申請を行い、6月23日、欧州理事会は両国を加盟候補国とすることを決定した（モルドヴァと同時にジョージアもEU加盟申請を行っていたが、将来の加盟候補国として位置づけられるにとどまった）。

本報告では、両国、とくにウクライナの歴史を振り返り、両国の形成・独立過程をみるとともに、両国とロシア・EUとの経済関係を見ることにより、なぜ「東」か「西」かで揺れてきたかを見る。次に、なぜロシアがウクライナへ侵攻したかを、過去数百年のロシアと西欧諸国との関係を振り返るとともに（なぜロシアは臆病な熊）、直近ではウクライナの西方政策（対EU・NATO政策）、経済パフォーマンスと政治状況を振り返ることにより明らかにしたい。最後に、今回の加盟候補国決定により両国とEUとの関係はどのように変わるのか、そして両国のEU加盟の見通しを考えてみたい。

報告者は、まず、政治学者でも、まして軍事専門家でもなく、ロシアのウクライナ侵攻の行方を考えることは本報告の目的ではない。また、ウクライナ情勢をフォローする者でもなく、同国の現状を詳らかにすることも本報告の目的ではない。ウクライナとモルドヴァの過去・現在を振り返ることで、本報告がロシアのウクライナ侵攻をより広く、多角的な視点から深く考える一助となれば幸いである。